

平成27年度国際交流委員会主催 特別講演会

赤十字の国際活動をとおして強く感じた 人間の尊厳・生命の尊さ

Human Dignity and the Preciousness of Life : Learning from hands-on relief activities of the International Red Cross

今村尚美*

Imamura Naomi

【キーワード】 赤十字, 国際救援活動, 人間の尊厳

1. はじめに

私の赤十字との出会いは、国際救援活動に従事する日本の赤十字の看護師が栄養失調のアフリカの乳幼児を抱いていた写真から、未知の世界の格差に愕然としたことに始まる。

私はその頃から国際救援に関心を持ち、これまで赤十字の看護師として9回の国際派遣の機会を得た。それらの派遣先は毎回異なり、日本とは全く環境も文化も異なる国々であった。そこでは地域武力紛争や自然災害に曝され、人命の喪失や外傷、インフラの破壊などの危機的状況を生じていた。苦痛に耐える人々への慈悲と同時に、何不自由なく過ごす自らの無知と無力感に憤りを抱くこともあった。しかしながら、国際活動の対象となる紛争犠牲者や被災者である患者や家族、地域の住民との出会いは、一期一会である。そのため、私は各派遣中に会う人々のために最善の仕事をしたと考えてきた。かけがえない人間の尊厳と生命の尊さを強く感じる出来事に何度か遭遇したので、現地での事実を日本の後輩たちに伝えたいと考えている。

2. 国際における赤十字の組織と役割

赤十字の国際活動は、組織や派遣形態によって役割が異なる。私が経験したのは、①赤十字国際委員会（以後、ICRC）による戦傷外科病院で携わった紛争犠牲者支援、②国際赤十字・赤新月社連盟（以

後、連盟）の支援する難民救援や自然災害後の医療救援や復興事業の立ち上げ、③自然災害後、日本赤十字社（以後、日赤）の仮設診療所における基礎保健緊急対応ユニット（以後、ERU）による緊急救援から復興支援、さらに、④平時の対象国との開発支援を目標にした日赤と対象国との二国間事業などがある。

そこで①戦傷外科病院と②難民キャンプ、③自然災害後の救援活動、以上3形態を通して得た体験を語ることにする。

3. 地域紛争や自然災害に対する国際救援

<()内は被援助国>

① ICRC 戦傷外科病院での体験（アフガニスタン、南スーダン、東ティモール）

ICRC 看護師の役割は、戦傷外科病院における負傷者のトリアージや創傷ケアや家族ケアであり、病院の管理や運営、さらにスタッフ教育であった。私は初めて地雷による傷や銃創を目の当たりにしたが、多くの患者は即死する。それゆえ、国境を越えて搬入される患者の命は、敵味方の区別なく救わなければいけないと志した。地雷による傷は、アフガニスタン国内の診療所で応急処置を受け、厚いガーゼをあててあり、開創しても出血もない失血状態だったが、患者の意識はあった。子どもも大人もICRC 戦傷外科病院で治療を受けて故郷に帰れる

* 熊本赤十字病院

ケースが多かった。

アフガニスタン難民は、イスラムの教えを守り、どんなに小さな傷であっても夫か父親に治療の説明と承諾（I.C.）が必要であった。ある日、地雷による顔面熱傷治療中の女兒の父親が治療は中断して帰国すると言い出した。私たちは、父親に何度説得してもその意思は変わらず、父親が女兒の手を引く後ろをうつむいて去る母親の姿に、無力感を覚え、異文化の壁を強く感じた。

東ティモールのICRCが支援した総合病院では、先進国からの多くの専門職の支援に加えて、手術室やICUには、酸素や基本的な医療機器やメンテナンスの難しい機器まで投資されていた。当時、国内の医師は7人で、ほとんどが国外に頭脳流出していた。東ティモールの死亡率は途上国内でも高い。病院では外国人は多くの手術や治療を提供し、人々を回復させ治療できた。帝王切開により早期産や低出生体重児1500グラム以下の小さな生命を救うこともできた。しかし、撤退の時期に今後の医療レベルの継続性が問題になった。支援開始時から撤退時の現地スタッフへの引き継ぎが可能であるのか、援助終了時の目標を視野に入れた支援が必要であることを学んだ。

②連盟の難民キャンプでの体験（ルワンダ、コンゴ）

「難民」とは「人種、宗教、国籍、政治的意見やまたは特定の社会集団に属することなどの理由で、自国にいると迫害を受けるかあるいは迫害を受ける恐れがあるために他国に逃れた」人々である（1951年の「難民の地位に関する条約」）。今日、シリア人が政治的な迫害のほか、武力紛争や人権侵害などを逃れるために国境を越えて他国に庇護を求め多くの難民問題が発生している。これには自然災害による緊急事態よりも長期間の支援が必要である。

私が最初に大量難民の衝撃を目の当たりにしたのは、1994年ルワンダ大虐殺による難民発生である。数日で数百万人の難民が隣国に流入し、路上で命を落とす者もいた。キャンプ内の環境劣悪な不衛生の中で、コレラの感染拡大により多くの死者がでた。飲料水の確保もできず必要な医薬品も点滴も不足し、多くの人道援助団体の中には経験も乏しく統制のないままやっていた。

私は同年11月にゴマ難民キャンプ（コンゴ民主共和国・旧ザイール共和国）内の連盟の病棟看護師として働き、クリニックの巡回や薬剤師の代役もこなした。病棟では現地看護師らと協力して患者のケアに携わったことで、意識のない患者が回復し、看護の喜びを味わうことができた。一方で、ある日患者

（乳児）の浅表性の呼吸が目の前で途絶えた。私は患者の急変に心肺蘇生法（CPR）をしようとした。すると、すぐに外国人手術室看護師が駆けつけて、限られたモノの環境でCPRに酸素を使うことは手術に影響するし、蘇生後障害が残ったら誰がその後の面倒を見るのか問われた。私は再び小さな生命を失い、その場で判断できずに困惑した思いが残った。

ルワンダ難民救援のあと、国際赤十字・赤新月運動及び災害救援を行う非政府組織NGOのための行動規範ができ、人道援助機関にとっての説明責任や災害救援の行動規範（Code of Conduct）10か条ができた。また、スフィアプロジェクト（The Sphere Project）¹¹には人道憲章と災害援助に関する最低基準が含まれ、被害者や被災者の尊厳ある生活を営む権利に注目している。国際的な災害救援・復興支援に関するガイドラインが採択され、救援者の判断の助けになっている。

③自然災害による被災者救援での体験（スリランカ、ハイチ）

スリランカでは20年以上の国内民族紛争により公衆衛生やインフラの崩壊に避難生活を送っている避難民がいた。さらに2004年地震津波による未曾有の大災害で複合人道危機となり、大規模で長期間にわたる支援が必要となった。

私は連盟の傘下、地域基礎保健事業を立ち上げ住民参加型活動を推進するためにスリランカに派遣された。時期は緊急支援から復興支援への移行期であり、津波被災を経験した対象地域を選択した。スリランカは、災害前から保健省と地域との支援システムが存在しており、私が派遣経験のある他の発展途上国よりも新生児や乳幼児、妊産婦の死亡率は高くなかった。しかし、実際に足を運ぶと貧困により、不衛生や母子の問題を抱える家族の生活が見えてきた。そこで不衛生に対し水衛生事業を行い、母子の問題では、栄養失調傾向にある乳児を持つ母親の場合は、訓練を受けた赤十字ボランティアや保健師と一緒に行動して住民と関わり支援した。当時、紛争はまだ終結しておらず、自爆テロも勃発する状況だった。しかし、人々は家族を大切に、宗教をベースに地域のつながりの中で、子どもも高齢者も大切にされ、紛争中の危機感の中に生命の大切さを感じることができた。

ハイチは経済的に世界の最貧国といわれ、被災前から死亡率は高く、識字率も低い暴動も多い状況で、他国の支援により依存してきた国だった。大地震では約22万人が死亡、約33万人が負傷し、コレラやサイクロン被害で大打撃を受けて全く復興の兆しは見

えなかった。私は被災後約1年4か月の時点で事業主任として派遣され、地域保健救急法（CBHFA）のアプローチを用いて、住民参加型活動による住民が住民の健康を守る地域に根差した保健事業を立ち上げた。地域へのエンパワーメントは、少しずつ地域の住民同士の結束力を強めた。選抜されたボランティアは、家庭訪問を行い、健康状態の改善に取り組む活動を支援した。また、お互いの地震体験を傾聴し共有するところのケア（PSP）を初めて体験した。大震災の影響は大きかったものの、住民は活動を通して人間の尊厳や生命の尊さを共有する大切さを体感したことを発言する者もいた。

4. 最後に

国際活動を通して考えることは、いかなる状況下でも人間の生命と健康、尊厳を守ることが第一である。世界の他国で起こっていることに関心をもつことによって、守られるべき小さな生命を大切にす気持ちをも多くの人が忘れずに、行動してほしいと考える。

1) スフィアプロジェクト The Sphere Project 2011年版, 2016年1月17日, https://www.refugee.or.jp/sphere/The_Sphere_Project_Handbook_2011_J.pdf

これまでの国際救援活動（赴任国）

- 1993年：アフガニスタン紛争難民救援（パキスタン）
- 1994年：ルワンダ難民救援（旧ザイール）
- 1996年：スーダン紛争犠牲者救援（ケニア）
- 2001年：東ティモール紛争犠牲者救援（東ティモール）
- 2003年：コンゴ難民救援（タンザニア）
- 2005年：スマトラ沖地震復興支援（スリランカ）
- 2011年：ハイチ大地震復興支援事業（ハイチ）
- 2014年：シエラレオネ共和国（シエラレオネ）
小児看護技術強化支援事業
- 2015年：ネパール大地震被災者救援

